

## 回り道

宮城県仙台二華中学校

二年 田中朝望

「今日、学校どうするの?」

「行かない。休む。」

日に日にそのやりとりは無くなっていった。というの、その会話が無のまま、学校へ行かないことが当たり前になっていったのだ。

中学生になった春、これから始まる中学校生活に期待と不安で胸がいっぱいだっただ。

七月上旬、勉強することに意味が無いと感じ、それまで一生懸命努力してきたものの、ふとやる気が無くなってしまった。仲の良い友達もでき、社交的だった私は、小学生の頃のようにうまくやっていけると思っていた。しかし、自分と考えが違う人との接し方に戸惑い、どうしていいのかわからなかった。その結果、なんとなく周りに合わせてしまい、どんな自分を出せずに辛くなっていったのだ。

夏休みに入り、それまで何とか頑張ってきたバドミントン部の辛い練習に耐えきれなくなった。同時に小学校二年生の時に思った持病の影響か、疲れやすくなり体調を崩し、それがきっかけで美術部に転部した。

学校でのトラブルや悩みは特にならないものの、登校する意欲が起きないまま夏休みが終わった。そして

徐々に学校へ行かなくなり、不登校になってしまった。何のために生きているのか、自分がいないほうが良かったのではないか、これからどうなるのか、どうすれば本当の自分に戻れるのか、という苦しみから逃れるようにスマートフォンをするばかりの毎日だった。学校へ行く必要性や義務を感じず、不思議と、欠席することに対する罪悪感はほとんど無かった。これから先もずっとこんな生活が続くのだという確信まであった。

何も変わらないまま夏休みが終わり、「無理のない程度に少しずつ行ってみたら?」と母から言われた。本当は嫌だったが、授業時間は保健室で、そして給食時間になると帰るとい生活は週二回のペースで続け始めた。友達はいたが、教室ではクラスのみんなの話についていけず一人では1つとし、自分だけ別世界にいるようで、登校した日はとても疲れたことを覚えている。学校までの道のりは気が重く、門をくぐることも、昇降口で靴を履き替えることも、教室に入ることも、何もかもが怖かった。

二年生に進級する前の春休み、クラスが新しくなったのと同時に、私も変わらなさと気持ち奮い立たせた。

そして四月。去年のようにならないよう、自己紹介の時から「自分」をどんどん出していった。すると、クラスのみんなが、私の好きなことについて話しかけてくれたり、私の話を聞いてくれたりして、ありのままの自分の姿を受け入れてくれたと感じた。

不登校の頃の、スマートフォンばかりやっていた毎日は、今思えばつまらなかった。今も将来の夢や大きな悩みはない。しかし、今のよう学校へ通えるようになるなんて、学校がこれほど楽しい場所だなんて、あの時は考えられなかった。きつと、不登校だった時間が、今この時間の楽しさを感じさせて

くれているのかもしれない。

当時、「どうして?」と思っていたことの答えはまだ分からない。しかし、長い人生の中で、一度立ち止まって自分自身を振り返るいい機会だったと思う。

友達と会うこと、学校の門をくぐること、勉強すること、全てが怖かった自分が、今はみんなと同じように始業に間に合うように起き、制服を着、学校の門をくぐり、そしてテストを受けられるようになり、教室では友達とワイワイ騒ぐ毎日を送っている、これは私にとって大きな成長だ。

去年不登校だったことを知らない友達に、自分から不登校だったと話す勇気はまだない。しかし、一年前の自分を、自分自身でこうして振り返ることができるようになった。私は単に時間が経ったからだと思っただが、母は、成長したからだと言った。案外、自分で気づかない、人に言われて気づいた成長こそが、自分を大人に近づけてくれるのかもしれない。「不登校」というマイナスなものから「挑戦・成長」というプラスなものを得られた。これから先、苦しいことや辛いことのほうがたくさん起こると思う。くじけそうになった時は、「これ乗り越えれば、大きなものが得られるはずだ。」と自分を信じて、前へ前へ進んでいきたい。

## 作文を書くに当たって

不登校というマイナスなものから、挑戦・成長というプラスになるものが得られたように、失敗を失敗と思わずにむしろチャンスだと思っほしいです。遠回りをすることで得られるものもあります。この作文を通して、去年の私のような状況の人の力に少しでもなれたら、少しでも前を向けるようになればと思います。